

## 第11回 仕事の話

さて、小さな鉄工所は小さいままで7年間ビジネスをして閉じました。これも、一つの失敗だったと思います。それから、一度、土地投資をしたことがありました。1972年に最初に購入した家をその7年後の1979年に、2倍の値段で売って新築の家を購入しました。それが、4年後、ほぼ2倍になった1983年でしたか、売って約10万ドルの現金を手に入れました。そして、目をつけたのが東部にあるトロント市の不動産でした。3軒の家を買い、直ぐに借家としてテナントを入れました。しかしながら、目論んだ値上がりはなく、逆に値段が下がってしまい、色々な経費を引いて手元には元金の3分の1しか残らない最悪の結果になってしまいました。これは、人生最大の失敗でした。バンクーバーでは、その後、借家暮らしを、もう妻には頭が上がりません。ひたすら、地道に会社勤めをして貯金に励みました。翌年の1984年に現在の家を借りて、ベースメントの部屋を以前と同じように日本人の若い人達に下宿屋として貸し、家賃の足しにしたのです。家は日本式に言いますと、敷地が約120坪、建物は2階建てで、上は3LDK、下は2LDKです。床総面積は約210平方メートルあります。ほぼ、バンクーバーの東地区では平均的な一戸建ての家屋です。

それから一年後、1985年の春、バンクーバーは翌年の1986年に世界交通万博が予定されていたため、再び土地の値上がりが顕著になっていました。そしてこの時だと思い、直接家主と交渉して借屋であった今の家を、不動産屋を通さずそのまま購入したのでした。

さて、その頃は、現場で工員として建設及びプラント製造の鉄工所で働いていました。しかしながら、一つの大きなプロジェクトが終わると現場ではレイオフが始まります。レイオフの序列は勤続年数によって決まり、新しい工員ほど最初にレイオフをされます。私は、いつも新しい工員でしたので、いつも最初でした。この事は、労働組合と会社との契約で決まっていたので、次の職場へと仕事を見つけて会社を変えました。レイオフ、つまり一時解雇ですが、それはファイアー（首切り）とは違い仕事が再び出ると、また、雇ってもらえると言う日本では余り経験した事のないシステムなのです。レイオフの間は失業保険で食ひ繋がります。長く続くと大変ですが、気持ちの上では、自分には技能があるので大丈夫だと楽観視していました。日本語で無職と言いますが、決して職（技能）を失くした事ではなく、ただ、働ける職場を失くしたので、次を見つければと、理解して、決して悲観的にはなりません。ある面では、無職と言うより、働く職場を失くしただけなので無（ム）職場者（しょくばしゃ）、あるいは、失（しつ）職場者と言った方が楽に思えると感じました。決して、自分の仕事の技能が無くなった訳ではありませんので、かえって人生の休暇だと思い失業保険をもらって少しノンビリした事もあります。

それから、1985年に300人ほど従業員のいる鉄工所に仕事を見つけて、そこに長く務める事になりました。そして、チャージハンド（日本では、係長の役職でしょうか）に昇格して、部下を10人ほど持ち采配を振るようになりました。しかしながら、5年後、1990年に、出来たばかりの小さな会社から工場長待遇のオファーがあり、そちらの方に魅力を感じて2週間ノーテス（予告）で転職しました。その会社との契約は、工場がロッキー山脈の南部、アメリカとの国境との近くにあり、バンクーバーから600キロも離れている所でした。当然、単身赴任となりました。でも、月に一度は、飛行機代をもらってバンクーバーに休暇で帰れると言う、かなり割のいい身分でした。またその新しい会社は、日本の大手製鉄メーカーと

の技術契約を持っていましたので、二回ほど、社長に同行して技術交渉者として日本へ出張した事もあります。一時は順調でしたが、1年半に渡る単身生活は、色々と、バンクーバーとは違った生活になったのです。例えば、日本料理を食べるために、一番近くて、何と150キロも離れた都市に行かなければならず、月に一度、バンクーバーに帰れると言っても、冬の季節はマイナス40℃にもなるロッキーの山の中での生活です。知らず知らずに、単身赴任の生活に色々と疲れて来たのだと思われまます。何しろ8月下旬でしたか、朝起きて外を見たら、何と、初雪が積もっていたのです。しばらくの間、夏の雪を見て呆然としてしまいました。

そう言う事が色々と重なって、ある時、エンジニアとして雇われている年老いたイギリス人と、技術面でイザコザが起きてしまいました。で、その時、何だか感情的になってしまい言い合いになってしまいました。で、結局、私が退職を余儀なくされたのです。その際、ケンカの様な衝突でしたが、全く人種偏見を感じる事はありませんでした。同等にケンカをしたと思います。しかしながら、後から思いますと、英語でのやり取りですので、私の方が相手に柔らかく話すと言う言い回しは出来ず、何でも思っている事をそのままストレートに出したため、相手の感情を逆なでする様な事になったのではないかと思います。で、結局、私はバンクーバーに帰る事になりました。つまり、私はクビです。この時は、文字通りの『ファイアー』でした。でも、最後はポツリと私の技術的見解が正しかったと、老エンジニアのイギリス人は気付いて、後で認めていました。でも、もうそれきりでした。

バンクーバーの家に帰り、暫く休んで、その後、仕事探しを始めました。そして、バンクーバーで新しく見つけた別の会社で働きました。でも、長く勤めても一年位で大きなプロジェクトが終るたびに、レイオフでした。でも、その頃は、子供達も成長していましたし、妻もパートで働いてくれてましたので、仕事がないにも関わらず、気持ちは決して落ち込む事はありませんでした。それは、結局、私が根っからの楽道家だったからだと思います。

その後、ある時、5年間勤めて自分から辞めた前の会社の部長に偶然街で出会ったのでした。そして、どうしているかと聞かれて、遊んでいると話すと、戻って来ないかと言うのです。少し、エッエッ〜！と言う気持ちでしたが、雇ってくれるならば、それは、それでいいかと思い、再び自分から辞めた前の会社へ戻ったのでした。戻っても、以前と、全く環境は変わりません。前からいる人も、戻って来たかと言うだけで、そのまますんなり同じ職場に復帰です。その点が、とてもクールなのです。多分、その点は大きく日本と違う環境だと思えます。その後、それから8年間ほど、同じ役職、チャージハンドを勤めて、20人ほどの部下を管理する立場になりました。ところが、中間管理職と言うか、立場上、上からは、強く押されて、下からも突き上げられて板挟みになってしまいました。その時、もう一人、私に目をかけてくれたイタリア人の部長から色々と言われて、結局、私が切れてしました。そして、会社を辞める事になったのです。それは、その時、今だから言えるのかも知れませんが、私は、責任感、仕事上の問題、部下からの不満、その上に英語でのやり取り等、多分、それは私の限界を越えたストレスだったのだと思います。その上、体力的に疲れていたのではと、思うのです。やはり、色々な事がありましたが、大きく言えば、私の持つ日本文化、つまり、東洋文化と、それに対してヨーロッパの文化、つまり、西洋文化とのぶつかり合いだったと思います。その後、会社を辞めて、暫くは休みましたが、そんなに遊んでいる訳には行かず、仕事探しをしました。で、直ぐに、次の職場は、見つかりました。しかしながら、その職場は車で通勤するのに少し遠く、朝は5時半に家を出なければならず、帰りも時によっては1時間半もドライブしなければならないと言う難点がありました。でもそこで、5年間ほど勤めました。そして、大きなプロジェ

クトが終了して、私は再びレイオフ、失業したのでした。(もう何度、レイオフになったか数えきれないほどです。会社を変わる事に、でも、もう慣れっこになりました。)

少し、大まかにこちらでの雇用体系を言いますと、ある面では社会全体が流動的ですので多分、日本の社会通念とはかけ離れていると思います。ですから、愛社精神とか、会社のためにとか言う気持ちは、低いと思います。しかしながら、やはり、結果を出さなければ君の行く先はあちらと、出口のドアを指さされてしまうのです。厳しいと感じる反面、逆に能力があれば上へと昇って行けるチャンスもあるのです。つまり、会社に勤めていても、気持ちの上では自分で自分の会社を経営しているような感じです。プロ野球選手のようにとは言いませんが、能力が認められたら大きなチャンスに巡り会えます。でも、その反対に能力が低下したら、トレードとか『はい、それまでえ～よ』となってしまうのです。正に、実力社会と言うのでしょうか。

何だか、見解の判らないお話しになってしまいましたが、やっぱり、こちらの会社は実力の世界と言う事でしょうかね。

でも、独立して会社を興して大いに成功された方々も多くいます。それは、日本と同様だと思います。

次回で、私の履歴話は、最終章にする予定です。



1985 年から現在まで、住んでいる自宅のフロントベランダから見える北方の山々です。 標高は 1,500 メートル。スキー場が見えます。

また、このスキー場から見える街の夜景が最高なのです。(インターネットで、Grouse Mountain で検索して下さい。North Vancouver でみると、沢山写真が出てきます。)

・・・次回 (最終章) へ・・・